

Title	コミュニケーション研究覚書：人間性への指向とGeorge Gerbnerの理論
Sub Title	A science of human communications and George Gerbner's theory
Author	宇野, 善康(Uno, Yoshiyasu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1963
Jtitle	哲學 No.45 (1963. 12) ,p.61- 84
JaLC DOI	
Abstract	"The state of communication research" is far from 'withering away' as Bernard Berelson suggested in the Spring 1959 Public Opinion Quarterly. Instead, a new science of human communications is coming into being. The human communications are central processes of human interactions to which sociologists' or social psychologists' main concerns are directed. George Gerbner suggests that there has been two types of concerns in communication research from its begining. He calls these the tactical and strategic. The tactical concern revolves around 'effectiveness' as measured by conventional goals and standards. The strategic concern raises questions about nature of goals and standards themselves. The latter approach must be "critical, comparative, systems-oriented, historical in its insights, empirical in its assessment of the evidence, independent of any one social and industrial system in its policy and value orientation, and is concerned with an emergent aspect of the dynamics of human survival and welfare from a coherent and unique point of view". He also points out the humanizing functions of communication such as 1. the art function of communication, 2. the science function of communication, 3. the administration function of communication.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000045-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コミュニケーション研究覚書

——人間性への指向と George Gerbner の理論——

宇 野 善 康

I

人間を生物界の中で、卓越した位置につかせている本性を、人間性という言葉で表現するとき、我々は、コミュニケーション研究を通してこの人間性の問題に、接近することは、どの程度、可能であるか。パプロフは、人間のみが第二次信号系の所有者であることを指摘して、大脳生理学的観点から、人間とその他の動物とを区別した。今日まで、その他の多くの学者が、人間と動物との生物学的な差異を、創造能力や象徴能力などに帰してきたが、社会心理学的なコミュニケーション研究の観点から、人間性の問題を掘り下げていくことは、どの程度まで許されるであろうか。そして、人間性に指向したコミュニケーションの研究は、人間の判断や相互理解、偏見の助長や対人的協調の問題に、何をもたらし得るだろうか。

この論文の目的は、今日みられるコミュニケーション研究の一つの趨勢の背後に、この研究の重要性を支えている思想や現実的観点があることを指摘し、このような思想や観点到立つて、コミュニケーション研究の現状と将来に言及することである。

ある研究分野の偉大なる開拓者は、一般に、人間性に対する深い自覚の上に立ち、自己の中に横溢する問題意識を力として、研究の方法や技術を展開する。生命が感ぜられる研究の魅力は、多くの研究者をひきつけずにはおかない。第二代目の後継者は、第一代目が掲げた問題意識に対する共

鳴から出発して、初代が考察した分析方法や技術の欠点を修正し、細部に亘つて補足する。こうして、一つの研究領域と研究方法や技術が確立されると、第三代目は、そこに安住してしまうか、枝葉末節についての穿鑿を事とする傾向が生ずる。確立された技術を踏襲し、それを適用することが使命となり、新鮮さを失つて研究そのものの魅力が極度に減退する。

初代の生命に溢れた問題意識と人間性への緊密な関連性とは、研究方法の中にいつまでも留まっているのではなく、これを扱う研究者の力量次第で、影を潜めてしまうからである。しかし、人間性に対する更に深い自覚と、横溢する問題意識に裏付けられた後継者が現れると、先代が樹立した学問は再構成され、輝きを増してくるのである。

この論文では、このような一般的過程を念頭に置いて、コミュニケーション研究の現状に言及し、あわせて、正面から人間性に指向した考察を試みている George Gerbner の理論の一端を紹介したいと思う。

II

社会成員による社会的相互作用の問題は、申すまでもなく、社会学者や社会心理学者の基本的な研究主題ではあるが、コミュニケーション作用は、この社会的相互作用において中心的な機能を果しているものである。人間が共同の生活を営み、たがいの心情・思想・意志を交換し、たがいに葛藤しあるいは融和し、あるいは切磋琢磨し、共通の生活理念を分有していく過程において、コミュニケーション作用が果している役割はまことに大きいといわねばならない。

呼びかけ、激励、哀願、指令、賞賛、罵倒、説諭、口伝、訴求、告白、胸襟を開く、相談、訊問、講演、評価、教示、善導、抗弁、調停、拒絶、反駁、誤解、お世辞、だいへん(代理返事)、前言取消し、懸案の具申、召喚、報道、流言、煽動

などの言葉は、コミュニケーション過程の多様性を示すと同時に、パーソ

ナリテイの形成や、人間の社会化の過程にとって、コミュニケーション作用が重大な意味を持つことを物語っている。

さらにまた、文学、絵画、音楽、演劇における思想や情緒や意図の伝達もコミュニケーション過程に登場してくる。文学における思想・情緒・意図は、今日、主として文章によつて、絵画におけるそれは配色とその力によつて、音楽におけるそれは音の高低・強弱・間合いの変化によつて、演劇は文学・絵画・音楽などを背景にもつた身振り、表情によつて、それぞれ伝達され共有されていく。思索は個体内コミュニケーション (intracommunication) によつて進められる。そして、この過程を含んで種々の事物や現象が分析され、対人コミュニケーション (intercommunication) によつて討議・検討が加えられる。科学はこのようなコミュニケーションの過程をふまえて前進していく。

このようなコミュニケーション作用を無視して、科学と芸術、ならびにそれを貫く思想をもつ人間王国の成立は考えられないことである。

しかし、コミュニケーション作用の重要性を以上のように考察することは、すでにきわめて古くからなされてきており、現代人にとっては、まことに陳腐な意見に過ぎないであろう。

後章で触れるように、現代との関係において、コミュニケーション研究の重要性を指摘すること、もしくは、現代社会がこの研究をいかに渴望している状態にあるかを指摘しなくてはならないであろう。そして、かゝる渴望の理由を指摘することは、現代社会に限らず、未来の社会がますます複雑化し、孤立的な人間が増加してくればくる程、コミュニケーションの研究が要望されることを予言することになる。現代社会の機構が、人間を孤独化し、非人格化していく傾向を強めれば強める程、人間性の恢復を目指すコミュニケーションの研究は、ますます重要性を帯びるであろう。そして、このような文脈においては、コミュニケーションの研究は、社会

心理学的に追求せざるを得ないと思われる。

III

「コミュニケーションの研究は先細り (withering away) の状態にある」と、Bernard Berelson は悲観的見解を述べた。これは、1958 年のアメリカ輿論学会で提出され、翌年、Public Opinion Quarterly Vol. 23 誌上に、その論文が掲載され、アメリカの学会において盛んな論議(主として反論)を巻き起したものである。

日本においても、アメリカナ第六巻第四号誌上にその全文が紹介され、共鳴と反論と誤解とを生起させた。共鳴は主として、今日の皮相的物まね的研究の流行を憂えている人たちから起り、反論は流行的趨勢には目もくれず、本格的な研究に打ち込んでいる研究者から起つた。そして、誤解は、コミュニケーションの研究を、戦後日本において悪疫のように流行したいまわしい「マス・コミ論」(主として即製的評論家によつて喧伝された論)の同類と看做している人たちに起つた。これはまた、コミュニケーションの研究は時勢に迎合した一時的流行であつて、やがて色褪せてしまい、生涯をかけて探求するに足らないものと見た人たちに起つた。すなわち、この場合の誤解は、この研究に対する先天的偏見に拍車をかけたに過ぎなかつたように思われる。なぜなら、Berelson は、「コミュニケーション研究は、……あまり重要でない分野であると考えるのは誤まりである。もし、この時代の行動科学の歴史が書かれるとすれば、……その貢献について大きな注意をひくであろうことは疑いの余地がない。」と述べ、この研究領域に対する憂国の至情を悲観的に開陳したまでに過ぎないからである。W. Schramm が、「この 20 年間に、コミュニケーション研究は、根本的な社会過程の一つを理解するために、堅実な貢献をしてきた。それは大学において、マス・コミュニケーションやその他の問題を教える上に大きな効果をもっている。」と述べている点からも、この研究の重要性に対する無理解

は反省されよう。

Berelson は、第一表 [コミュニケーション研究における四人の創始者の研究傾向] *Lines of Inquiry of Four Innovators in Communication Research* を掲げ、1930年代より発達した4つの主要な研究方向を示した。すなわち、表中にみられるように、Lasswell によつて代表される政治学的分析、Lazarsfeld によつて代表される標本調査法、Lewin による小集団研究、Hovland による実験的研究の4種である。Lasewell は、広範な政治社会学的な研究に関心を示しているので、巨視的な研究方向を代表しているといえる。Lazarsfeld と Hovland は、個人の反応に関心を示しているため、これは微視的な研究方向の代表者である。Lewin は、社会集団に関心を持ったので、両者の中間に位する研究方向を代表している。Berelson は、以上の4人による研究を *major approach* とし、この外に過去20年間、それ程大きな影響を持たなかつたが行われてきた研究を *minor approach* と呼び、4種類挙げている。

5. 革新的な人たちによる研究 (*The reformist approach*) これは、マス・メディアの組織、構造、統制をとり扱い、とくに公共政策を考える新聞自由委員会によつて代表される。

6. 広範囲な歴史的研究 (*The broad historical approach*) これは D. Riesman や H. Innis によつて代表される。

7. *The journalistic approach* これは、メディアの統制面、送り手の特徴、実用的な関心について研究するもので、職業教育機関や、Casey, Nixon, Schramm らによつて代表される。

8. 数学的研究 (*The mathematical approach*) これは Shannon や Weaver によつて代表される。

9. 心理-言語学的研究 (*The psycho-linguistic approach*) これは Osgood や Miller によつて代表される。

10. 精神病理学的研究 (*The psychiatric approach*) これは Rusch や

第一表

LINES OF INQUIRY OF FOUR INNOVATORS IN
COMMUNICATION RESEARCH

Innovator	Representative Titles	Base	Interest
Lasswell —early '30's	<i>World Revolutionary Propaganda</i> <i>The Language of Politics</i>	Political science	Broad politico- historical approach. Concern with power.
Lazarsfeld —late '30's	<i>The People's Choice</i> <i>Communication Research...</i> <i>Voting</i>	Social psychology moving toward Sociology	Specific shortrange, empirical problems; tie to market re- search. Concern with audience and effect.
Lewin —late '30's	<i>Informal Social Communication</i> (by his students)	Experimental psychology moving toward Social psychology	Personal relations in small groups. Concern with influence and communication therein.
Hovland —early '40's	<i>Communication and Persuasion</i> <i>Experiments in Mass Communication</i>	Experimental psychology moving toward Social psychology	Psychological analysis of effects.

<i>Typical Categories</i>	<i>Materials and Methods</i>	<i>Typical Propositions</i>
<p>Fact and value statements.</p> <p>Symbols of identification (i.e., political).</p>	<p>Documentary</p> <p>Content analysis</p>	<p>"Propaganda pushes the intensity of the situation to extremes: facilitates catharsis if interest is low, and precipitates crisis if interest is high."</p> <p>"Political symbols circulating among the power holders correspond more closely to the power facts than do symbols presented to the domain."</p>
<p>Demographic and "questionnaire" categories.</p> <p>Social position of respondent and his attitudes (i.e., sociological).</p>	<p>Mass responses; interview in field; sample survey.</p> <p>Natural setting approximated.</p>	<p>People tend to expose to communications whose content is congenial to their predispositions.</p> <p>Communications exposure "pushes" people to a decision, but mainly in line with their latent attitudes.</p>
<p>Autocratic and democratic leadership; press toward uniformity within group (i.e., psychological).</p>	<p>Individual behavior under group pressures.</p> <p>Experimental settings, quasi-natural.</p>	<p>Pressure to communicate within a given topic increases with the discrepancy within the group, the cohesiveness of the group, and the relevance of the issue to group morale.</p> <p>Pressure to communicate to a given individual within a group decreases to the member is not wanted in the group.</p>
<p>Characteristics of message and effect, e.g., type of appeal, onesidedness, source credibility, sleeper, boomerang.</p>	<p>Psychological processes.</p> <p>Experiments in laboratory.</p>	<p>One-sided communications are more effective with those initially favoring the position taken both-sided communications are more effective with those initially opposed.</p> <p>Recall of factual material fades with time, but initial opinion changes are strengthened, especially when in line with prevailing group attitude (sleeper effect).</p>

Bateson によって代表される。

以上のような研究の諸方向を挙げたのち、Berelson は、これらの偉大な研究を更に発展させる気運が、現在みられないとみて悲観したのである。これに対して、コミュニケーションの研究は、現在、各地でいかに真剣に進められているかその事実を挙げ、多くの学者が反論を試みたことは申すまでもない。

この論文の最初に述べたように、研究の深化には外見の花々しさとは違った段階があることを想起することが必要であろう。あたかも、未開地の開拓者が、森林を伐り倒し、土地を荒く起して、とに角、住地を設営するとき、これは輝かしい業績として評価される。しかし、二代目の仕事は、その土地を丁寧に耕し、建物の細部を便利にし、収穫を挙げ、その土地を安住の地とするのに似ている。これが女性的な業績とみられるに過ぎない。

現状を悲観的に見た Berelson の投石は、コミュニケーション研究の重要性を再確認させると共に、濁流のような流行的研究や商業ベースに乗った研究にかくされている少数の本格的研究をも発掘することになった。

しかし、今日のコミュニケーション研究の隆盛を招いた出発点と風潮に問題がないわけではない。Berelson が指摘しているように、現代の意味でのコミュニケーション研究は、学問的必要性のみならず、ラジオ産業がそのオーディエンスの実態を知る必要性と共に生れてきたものである。したがって、一つには、コミュニケーション研究の方向が御用学者的傾向を強め、（これは、ドイツ的な学問の洗礼を受けたものが、アメリカのプラグマティックな学問を批判する言葉であるが）思想的な深化よりは技術ならびに技術論の進歩に鋭意、力が注がれてきた点である。

もう一つの問題は、コミュニケーションの領域が、社会過程にしる、認知過程にしる、およそ、人間行動の関与する所に展開している広大なものであり、学問的な背景をもつてこの鉱脈を掘鑿していけば、偉大な理論に

も達することができるという点である。今日のコミュニケーション研究の隆盛を招いた創始者たちの中、「Lazarsfeld のみが、この研究を中心に行つただけで、Hovland は認知過程 (Cognitive process) に関心を示し、Lewin は集団の機能 (group functioning) に、Lasswell は政治権力 (political power) に関心を示した。そして、彼らはより広い領域へ進むための好都合な入門領域として、コミュニケーションを扱つたのである」。この傾向は、この3人に限らず、[大衆説得] (Mass persuasion) を著わして社会科学に大きな影響を与えたマートンも、やがて「社会理論の偉大な建設」へと進んで行つた。また、優れた[認知不協和の理論] (theory of cognitive dissonance) をコミュニケーション研究を通して打ちたたてた Festinger もコミュニケーションの領域を認知過程の理論への道として採用したのである。研究者のこのような動向に対して、アメリカの学生の傾向をつぎのごとく指摘することができよう。多くの熱心な学生がコミュニケーションの課題に真剣に取り組んでいるという多くの事実に対して、D. Riesman はつぎのような考察を加えている。

「コミュニケーション領域における研究は、現在、その不明確さと構造を欠いている点で魅力的なのである。コミュニケーションの分野は、文学（これは英文学科によつて独占されている）や社会科学（社会学科や政治学科によつて独占されている）に専念することを望まない人々が集まる一時的な中継所 (transient way station) のようにみえる。また、こゝには、経済学や美学に関心をもつ人たちのための場所もある。そして、非常にすぐれた学生と、そうでない学生とが大学の既存の勢力に自己を投ずることをためらつて、こゝに惹きつけられてくる。」

この事情は日本にもみられるが、問題は、学問的背景をもつて、この領域を専攻する準備が学生に欠けている点にある。学生たちは、鋭敏に現代を感じとり、真剣に現代を生き抜こうとしている。しかし、「よき時代」のよき生き方とは、方法も方針も心構えも多分に異つているので、古き時

代の人からは、それが余りにも打算的で余裕がなく、その場間に合わせて落着きがないように見えるのである。しかし、これは、学窓を立つて職につく社会の受け入れ態勢が余りにも日本的であり、学校制度が余りにもアメリカ的であるという矛盾が、学生を苛立たせている結果、生じているのである。学生の側におけるコミュニケーション研究の現状も、この事情を度外視する訳にはいかないであろう。しかし、コミュニケーションの無辺の領域は、学問的背景をもつものによつてのみ攻略できる領域であり、徒手空拳の徒には、五里霧中の嘆を懷かせる捉えどころのない領域である。社会科学の先覚者たちが築いてきた理論や、編み出した方法は、この領域の研究に偉力を発揮することが学生たちに看過されている趣きがみられる。

とに角、コミュニケーション研究の現状に対するつぎの見解は、筆者にもつとも納得のいくものである。

1959 年当時、Harvard 大学の the Graduate school of Business Administration の訪問教授であつた Raymond A. Bauer は、この点に関連する意見をつぎのように述べている。

「今日のコミュニケーション研究に、偉大な思想が欠けていることを悲しむものがない。それは、Lasswell の研究の一部を除いて、初期のコミュニケーション研究は、思想を中心とするものでなく、方法論的研究を中心として、コミュニケーションの一般領域に関心を向けていたからである。内容分析、調査研究、スモール・グループ・ダイナミックス、組織的な心理学的実験などがその例である。これらの研究方法は、それぞれの特徴と方法の限界が明らかにされる点まで開発された。そして、これらの研究方法の開発が充分に進んでから、問題の本質へと重点が移つてきたのである。

IV

ところで、論議の中心となつているコミュニケーションとは何であるか。この解明からコミュニケーション研究の将来を見定めてゆこう。最初に、

コミュニケーションの成立ということを念頭におき、伝達におけるメカニズムの面（構造的側面）に着目して考察を進めよう。コミュニケーションには、かならず、ある意味を送達する送り手と、それを受ける受け手とが存在していなくてはならない。ただし、個体内コミュニケーションは、送り手と受け手とが同一の個体であるから特殊な場合と看做されるが、とに角、コミュニケーションの成立には、送り手（無意図的送達を含む）と受け手が存在することが必要条件であることから始めよう。

定義 I. コミュニケーションとは、ある意味が、その送り手から受け手に伝達されることである。と定義すれば、この定義は、まことに広い領域を包含することになる。なぜなら、伝達者が伝達の意図を持たないある意味内容が相手に伝達される場合も含まれるからである。いま、対話中の二人の表情を第三者が観察し、何か感銘を受けた場合、対話中の二人は、この第三者に対して伝達意図を持たないが、彼らの表情は光刺激となつて第三者に到達し、そこに感銘の原因となる意味を成立させているので、これは定義によつて、コミュニケーション過程と看做さなくてはならない。また、暮色迫る美しい夕べの景色からある意味を読みとることもコミュニケーション過程を含んでいる。シンフォニーの演奏会場において、聴衆が感銘するのは、音波に乗つてくる演奏された旋律のみからではなく、指揮者の指揮ぶりや演奏者の態度や、照明に輝く舞台上の雰囲気や、他の聴衆がもらす厳肅な吐息や、あるいはくつろいだ柔和な興奮によつてである。聴衆を興奮させた種々様々な刺激は、コミュニケーション作用によつて統合的な効果をもたらしたと解することができる。もし、この場合の受け手が、人間以外の動物であつても、この定義は通用する。すなわち、笹のざわめきを見て外敵を感じ、逃走する小動物の行動にはコミュニケーション過程が含まれている。また、猿沢の池のほとりで、手を打つとき、その音を聞いて寄つてくる魚の群も、茶の支度をする下女も、驚いて飛びたつ鳥もコミュニケーション行動に参加したことになる。

このようなコミュニケーションの領域は、こんにち、Visual Communication や Auditory Communication の領域として研究が着手されている。前衛絵画や前衛書道も、室内の装飾や服装なども、この Visual Communication の研究対象となる。しかし、世界共通の言葉であるといわれる音楽は、これとは別の Auditory Communication 領域の研究対象である。

これらのコミュニケーション過程の特徴は、受け手の態度、先有傾向や受けとり方によつて、伝達刺激による意味の成立が全く種々様々になる点にある。すなわち、伝達される刺激と意味の成立との間には、特定の関係が欠如している。

つぎに送り手の伝達意図という要素を定義の中に加えてみよう。

定義 II. コミュニケーションとは、送り手が特定の相手に送達することを意図した送り内容を、受け手に送達することである。

この定義に対しては、つぎのことが考察できる。精神異常者が全く奇妙な表情をして相手に何か喚いた場合、その異常者が相手に対して何かを意図して喚いたとしても、相手には通じないであろう。すなわち、コミュニケーションは、この異常者と正常者の間においては成立しないのである。また、ウクライナ人がウクライナ語によつて、それを知らない英国人に話しかけたとしても、この送り手は、ゼスチュアや表情や図を画くことによつて、自己の意図を相手の英国人に通じさせることに成功しなければ、この場合もコミュニケーションは成立しないであろう。このような事情にあるコミュニケーションを見かけ上のコミュニケーション (pseudo-communication) と名づけて先へ進もう。

この場合の二つの例は、Auditory の面において伝達は不成立ではあるけれども、表情、身振りその他、視覚を通して送り手の表現が訴えられるから、ともに前に述べた Visual Communication の領域で扱われなくてはならないものである。

この定義についてはさらに、送り手が特定の相手に、ある送り内容を意

図的に送つたとしても、受け手がこれを受容する意志の全くない場合には、やはり、コミュニケーションは成立しない。この場合も、見かけ上のコミュニケーションとなる。

すなわち、この定義で欠けているのは、ある内容が伝達された場合、受け手に受容の意志があるという要件と、それが受け手に了解可能なものでなくてはならないという要件とである。コミュニケーションの送り内容が、相手に了解可能であるためには、コミュニケーション当事者（送り手と受け手）間において、ある刺激もしくは信号や象徴が、特定の意味を持っていることが了解されていなくてはならない。この了解可能性は、学習や取り決めによつて両者の間に、あらかじめ準備されなくてはならないものである。そして、了解可能な刺激が、受容意志を持つ受け手に到達した場合には、受け手は、それに対して体内的反応をも含めた何らかの反応を起す筈である。そこで、この定義に送り内容の意味の共通性あるいは了解可能性という条件と、受け手における受容意志ならびに、送り内容に対して受け手側に反応が生ずるという条件を加えてみよう。たゞし、わずらわしさを避けるために、送り手とは、特定の相手にある送達内容を意図的に伝達する個人と定義し、受け手とは、送り手が指向し、送り手によつて送達された伝達内容を受容する意志があり、受容の結果、反応を期待しうるものと決めてかゝろう。すなわち、

定義 III. コミュニケーションとは、送り手が受け手に了解可能な伝達内容を送達し、受け手は、それによつて何らかの反応を起すことである。

こゝでいう「了解可能な」という条件は、送り手と受け手が同一の言語体系を共有すれば満たされると考えられ勝ちであるが、必ずしもそうではない。大阪弁で「ちよつとしたもの」といえば、「ほんのつまらないもの」という意味であるが、東京では、「なかなかよいもの」という意味で使われている。日本では、他人に贈物するとき、「ほんのつまらないものですが」といつて渡す習慣がある。アメリカでは、「大変よいものですから」といつ

て渡す習慣がある。日本へ来たばかりのアメリカ婦人が、日本人から品物を贈られる毎に聞く「つまらないものですが」という言葉の意味を、アメリカの習慣に照して、「すばらしい」という意味にとり、その後、すばらしい贈物をされたとき、特別製の日本語で、「おゝ、なんてつまらないもの！」と感謝の意を表したと聞いたことがある。信号の容器 (sign-vehicle) は同一であつても、意味内容 (content of meaning) は必ずしも同一ではない。このように、了解可能という条件は、同一の言語体系を共有するだけでなく、風俗、習慣、生活感情をも共有しなくてはならない場合がある。すなわち、同一文化を共有していることが、「了解可能」なための必要条件である。口角泡を飛ばす議論にも拘らず、それが非生産的である場合は、討論者たちが、議論に同じ用語を使用し乍らも、その意味内容がそれぞれ異つているためである場合が多い。これは、主義を異にしている討論者の間に、しばしばみられる。

George Gerbner によるコミュニケーションの定義は以上のことが考慮されている。

定義 IV. コミュニケーションとは、messages を通して行われる社会的相互作用である。そして、messages とは、一文化の中で共通の意味を持ち、その意味を喚起する目的で産出される事象であつて、この事象は、形式的に符号化された、象徴的もしくは表象的なものである。

Gerbner は、人間行動の研究に対するコミュニケーションからのアプローチと、他のアプローチとの相異点をつぎの2点で示している。

(1) messages が、研究対象となる過程に密接な関係をもっているか否かによつて、

(2) messages の生産、性質、利用に関する研究が、アプローチの中心的なものになるか否かによつて、コミュニケーションの研究が特色づけられるとしている。

V

以上は、コミュニケーションを、構造の面から考察した結果である。そして、コミュニケーションは、二人以上の人間の参加を基本条件としていること、すなわち、社会の成立を基本条件としており、その社会成員間の相互作用、すなわち、社会過程の橋渡しを行い、相互作用を促進させる構造をもつものであることが明示される。すなわち、コミュニケーションとは、二人以上の人たちの間で、共通な (common) ものごとを互いに分かちあう (communicate) 過程であり、人間が生活の共通の場として作り出した共同体 (community) の維持と発展とに欠くことのできない成員相互の意志流通の過程である。

人間性に対するコミュニケーションの存在意義は、その機能に躍如たる面がみられる。

Gerbner は、コミュニケーションのもつ人間性賦与の機能 (humanizing functions of communication) に着目し、彼の理論を展開しているが、彼のコミュニケーション研究における人間性への指向は、研究の現状に深い反省を促し、発展的出発への勇気を与える何ものかをもっている。

彼は、Homo sapiens がどのような過程を経て人間性を具えるに至ったかを問題とする。最初に、人類が、強力で、たしかで、デリケートな道具である手を使用し始めたことに着目し、やがて、大脳と手との共同作業が大脳の能力を増すことになり、心像としてあるものを想起したり、貯蔵したり、考えることができるようになることを想定する。そして、この能力が、messages の生産と使用との先行条件となり、ヒューマン・コミュニケーションが誕生するのをみる。そして、人間進化の過程において、コミュニケーションが独特の役割を果たしてきたことを考察する。Homo sapiens の叡智の根源は、象徴能力 (symboling ability) に発しているが、これは道具作製の能力 (Tool-making ability) の進歩したものであること。そし

て、この象徴能力が messages を生産し、記録し、表現し、再生産すること。さらに、意味を記号化し、共有し、解釈する能力となること。かくして、五管の関与する範囲以上に意識の領域は拡張され、人間の能力についての Vision を獲得し、他の動物の及ばない能力を備えるにいたることを考察する。コミュニケーションは、また、他の人間性賦与の過程としてもつとも人間的な特徴をもつ共同労働 (collabolation) や共同社会 (community) をせんじ出した。そして、社会や文化に対して特殊な機能を果すことによつて、この役割を演じたのであるが、これらを、彼はコミュニケーションの人間性賦与の機能と呼んだ。コミュニケーションは、すなわち、人間性賦与の過程とみることができる。

そして、彼は、この人間性賦与の機能について、三つの方向を示した。

1. コミュニケーションの芸術的機能 (the art function of communication)——これは、作業を容易にし、生活を華やかにし、生活や世界をみる見方をたしかにするなどの機能を果す。

コミュニケーション技術者としての送り手は、辛苦に堪え、喜びを分かち、危険を避け、共同生活の成長を祝福するとき、報らせたり、激励したり、驚ろかせたり、歓待したりするのである。彼は、文化の中の真実を信じうるものにし、また強制するのである。

2. コミュニケーションの科学的機能 (the science function of communication)——科学者としての送り手は、命題の有効性を評価する義務をもつ。彼の機能は、したがって、信念をより真実に近づけることである。

3. コミュニケーションの管理的機能 (the administrative function of communication)——人を動かす技術や、山を動かす科学は、人間に人や山を動かす力を授ける。この力の配分と使用が、コミュニケーションにおける第3の人間性賦与の機能である。管理者としての送り手は、message の生産、利用、選択をあつかう。

科学者としての送り手の人間性賦与の役割は、信念をより真実にするこ

とであり、芸術家としてのそれは、真実をより信じやすくすることであり、管理者としてのそれは、自由の目的を進め、知識をより広くするために、message 体系のエネルギーと力とを組織化することである。

VI

以上の考察によつて、われわれは、コミュニケーションにおける人間性賦与の機能を基本的な形で把握することができる。しかし、II. において触れたように、この巨大なる現代との関係において、コミュニケーションの機能を検討することが残されている。それは、現代が、かつての時代と比べて質的な転換を遂げつゝあり、もはや、過去の考察のみでは通用しない面が現代に現れているからである。

コミュニケーションにおける message の性質や役割についての研究は、つぎのような理由で必要視されるのが通常である。すなわち、コミュニケーション技術の向上や評価、ならびに messages や messages の組織が伝達する知識の獲得や改善などのためである。言語の研究や修辞学、文学、芸術その他、種々の言語的ならびに非言語的な表現についての研究のためである。

これに対して、20 世紀の歴史的・文化的環境は、新しい角度から messages の性質と役割を検討することを要求している。産業革命が、人間と社会との関係を変革したとき、messages の大量生産によつてもたらされたコミュニケーション革命が、人間と文化との関係を変革したからである。そして、この変革のために、messages の性質と役割に関する基本的な仮説を再検討しなくてはならなくなつたからである。最近、Gerbner が、筆者の訳著をかざるために送つてくれた「日本の読者へのメッセージ」は、上述の事情を簡潔に要約しており、かつ、コミュニケーション研究の将来を画いており、今までの論述を結論づけるのにまことにふさわしいものである。筆者は、[現代社会学]（米山桂三編）の第六章（大衆社会の理解、お

よびマス・コミュニケーション) やその他の論文において、現代的状況とコミュニケーションとの関係をいくらか考察しているので、こゝでコミュニケーションの現代的意義ならびに役割を再述するのを避け、Gerbner が送ってくれた「日本の読者へのメッセージ」の一部をこゝに掲載し、この拙稿の結びにかえたいと思う。

VII

〔日本の読者へのメッセージ〕

世界における「コミュニケーション研究の現状」は、Bernard Berelson が、1959 年の春、Public Opinion Quarterly で云ったような「先細りの状態」では決してないのであります。そうではなく、コミュニケーション研究において、その当初から現われていた二つの研究傾向は、二種類の違った課題を提出しております。私は、この二つの課題の一方を戦術的 (tactical) と呼び、他方を戦略的 (strategic) と呼んでおきたいと存じます。

戦術的な研究課題とは、コミュニケーションが、どのような「有効性」をもつかという、従来の目的と基準によつて研究するものを指します。しかるに、戦略的な研究課題とは、コミュニケーションの目的および基準それ自体について、問題を提起するものであります。すなわち、これは、戦いに際して、どのような手段をとれば、もつとも首尾よく戦うことができるかを問題にするのではなくて、一体、どの戦いが真に戦うに値するかを検討するものであります。

Berelson が、彼の論文において論じた Lasswell から Lazarsfeld へ、そして、Lewin から Hovland へとつゞく一連の研究は、主として、大衆を強制し、説得し、意のまゝに操作するといった戦術的な課題に関連していました。このような系列の研究のおかげで、コミュニケーションの影響についてのわれわれの理解は、たしかに深まつてきております。もしかす

ると、われわれが実際に応用することのできる——おそらくは必要——以上のことをわれわれはコミュニケーションについて知っているかも知れません。今日までの研究から得られた、これらの洞察的知識を、実際に応用した結果、すでに強力な活動の分野が生れております。これらの活動は、ご承知のように、あるいは学究的な、あるいは政治的な、あるいはまた経済的な立場から進められていますが、その主なものは、各方面の推進運動^{キャンペーン}とか、市場調査といった形の活動にみられます。

しかしながら、コミュニケーション研究については、過去数年間の活潑な胎動期を経た現在、もう一つの研究態度が確立しつつあることを私は指摘することができます。

この研究の方向は、社会と文化におけるコミュニケーションの役割を、もつぱら戦略的に研究することに向けられています。新しく確立されつつある研究態度によれば、コミュニケーションとは、messages による社会的相互作用と定義されるものであります。その目的は、messages による社会的相互作用のもっている人間性賦与の要因の基本的な前提を検討することであり、社会科学に関連するいかなる学問も、このような中心課題と主目的とをもっているものは他にないと存じます。

コミュニケーションの研究に対する戦略的な研究方法は、たゞ単に、研究の一方法であるに止まらず、あきらかなる独自性と知的内容、および歴史的根拠と使命をもつたものであります。そして、私は、コミュニケーションの戦略的な科学が、いまや確立されようとしている一つの社会科学であるとの信念を、日々、強くしているものであります。このような研究態度が生れてきた理由は、産業革命が社会の性質を変貌させ、生活の質を変え、個人と社会との関係をも変容させてしまつたのと丁度同じく、messages や messages の手段の大量生産が、（これは文化の領域にまで産業革命が及んできたものですが）文化の動態を変貌させ、一人一人の人間に対する人間形成のあり方をも変容させ、さらに、個人と社会との関係を変

えてしまったことを、われわれが認識したからであります。

極度に産業化されていく社会においては、コミュニケーションの^{メディア}媒体はますます大企業の文化的な武器となつていきます。このような媒体は、とどまることなく共通の文化を大量に生産していきます。そして、人間の意識は、このような圧倒的な社会的影響力に隷属されるようになつていきます。今日、要求される人間像は、有力な社会的、産業的組織体が要求する人間像になつてきています。

人間の幸福な生活に必要な物資を作り出す力が、産業化された社会に増大すればする程、社会体制のひき起す緊張と圧迫は、文化の領域にまで押しよせてくるようになります。

権力のための闘争、人間の諸行事に参加するための闘争、前より一層多くの資源を、従来より一層平等に分配するための闘争、その他もろもろの社会正義をめぐる闘争、そして、実に、核時代に生き残るための闘争といったいろいろな争いは、従来の古い戦場から、また、古い闘争手段からますますはなれて、大量生産された文化の中における制覇と競争という新しい領域へと移つてきております。これは、大量生産された共通の文化に身をまかせるか、あるいは、背を向けるかの争いでもあります。

このような事態の下では、コミュニケーションの科学は、たゞ 戦術的な問題だけをいじりまわしていることに満足すべきではありません。コミュニケーションの科学は、コミュニケーションに携わる人々が、現在もっている目的や目標や価値や文化的な習慣を、直ちに、この学問の出発点ないしは評価の基準とすることはできないのであります。むしろ、このような科学こそ、コミュニケーション成立の場全体からみて、学問の目的や目標や価値を、どのように評価すべきかという問題として取りあげることができるものでありますし、また、取りあげるべきものなのであります。そして、これは、社会的組織体や産業的組織体がもつ従来とは異つた条件の下で、大量生産される messages および messages 体系の有する人間性

賦与の要因を一層よく理解するためなのであります。

新しいコミュニケーション科学は、その洞察が批判的、対比的であり、また、体系指向的、歴史的であつて、事実の評価に対しては実証的であり、研究の方針と価値指向においては、いかなる社会的、産業的体制にもとらわれず、そして、人間の生存および福祉に必要な新たな動因を一貫した独自の見地から取り扱う場合にはじめて、われわれの知識に対するその貢献が戦略的となり得るのであります。

附 録

PUBLICATIONS

by

George Gerbner

- "Teacher vs. the Machine: The Headline Battle of Atlantic City,"
AV Communications Review, 11: Summer, 1963.
- "Un Modèle de la Communication," *Etudes de Radio-Telvision* (Brussels) 1: 30-42, Spring 1963.
- "Mass Communication and the 'Humanization' of Homo Sapiens,"
The AAUW Journal, March, 1963.
- "A Theory of Communication and Its Implications for Teaching," in
The Nature of Teaching, a symposium published by the University
of Wisconsin-Milwaukee (School of Education), 1963.
- "Smaller Than Life: Teachers and Schools in the Mass Media," *Phi
Delta Kappan*, 44: 202-205, February, 1963.
- Instructional Technology and the Press: A Case Study*. Washigton,
D. C.: National Education Association, Technological Develop-
ment Project, Occasional Paper No. 4., 1962.
- "Mass Media Censorship and the Portrayal of Mental Illness: Some
Effects of Industry-Wide Controls in Motion Pictures and Televi-
sion," with Percy H. Tannenbaum, in *Studies of Innovation and
of Communication to the Public*, edited by Wilbur Schramm,
Stanford University, 1962.
- "How teachers can respond to the challenge of video," *Professional
Growth for Teachers* Vol. 7, No. 6, 1962.
- "Technology, Communication, and Education: A Social Perspective,"
in *Tomorrow's Teaching*, Oklahoma City: Frontiers of Science
Foundation, 1962.

- “Press Perspectives in World Communications: A Pilot Study,” *Journalism Quarterly* 38: 313-322, Summer, 1961.
- “Regulation of Mental Illness Content in Motion Pictures and Television,” *Gazette* 6: 365-385, 1961 (with Percy H. Tannenbaum).
- “Psychology, Psychiatry and Mental Illness in the Mass Media: A Study of Trends, 1900-1959,” *Mental Hygiene* 45: 89-93, January, 1961.
- “The Individual in a Mass Culture,” *Saturday Review* 43: 11-13, 36-37, June 18, 1960. Also (abridged) in *The Executive* 4: 14-16, 1960, and *The National Elementary Principal* 40: 49-54, February, 1961.
- “Mass Communications and the Citizenship of Secondary School Youth,” Chapter 6 in *The Adolescent Citizen* by Franklin Patterson and others. The Free Press, Glencoe, Illinois, pp. 179-205, 1960.
- “The Interaction Model: Perception and Communication,” in *Research, Principles, and Practices in Visual Communication*, ed. by John Ball and Francis Byrnes. National Project in Agricultural Communications, East Lansing, Michigan, pp. 4-15, 1960.
- “Social Science and the Professional Education of the Audio-Visual Communication Specialist.” *AV Communications Review* Vol. 8, No. 5: 50-58, Sept.-Oct., 1960.
- “Visual Communication Training; Philosophy and Principles.” *Communication Training*, National Project in Agricultural Communications. East Lansing, Michigan, pp. 29-34, 1960.
- “Education and the Challenge of Mass Culture,” *Audio-Visual Communication Review* 7: 264-278, Fall, 1959.
- “Popular Culture and Images of the Family,” *The Chicago Theological Seminary Register* 39: 31-37, November, 1959.
- “Mental Illness on Television: A Study of Censorship,” *Journal of Broadcasting* 3: 292-303, Fall, 1959.
- “The Social Anatomy of the Romance-Confession Cover Girl,” *Journalism Quarterly* 35: 299-306, Summer, 1958.

- “The Social Role of the Confession Magazine,” *Social Problems* 6: 29-40, Summer, 1958.
- “Content Analysis and Critical Research in Mass Communication,” *Audio-Visual Communication Review* 6: 85-108, Spring, 1958.
- “Communication in Christian Education,” *Educational Screen* 36: 78-81, February, 1957 (with John G. Harrell).
- “Toward a General Model of Communication,” *Audio-Visual Communication Review* 4: 171-199: Summer, 1956.
- “A Study of Audience ‘Involvement’ or ‘Interest’ in a Training Film.” Air Force Personnel and Training Research Center, 1954 (with Lester F. Beck).